随想

「冒険を否定した」冒険家

—— 守誠

無線機なし、エンジンなしの手作りヨット「信天翁2世号」で世界一周を果たした青木洋が、3年半ぶりに日本に帰ってきた。無名のヨットマンは帰国と同時に「英雄」になった。1974年7月のことである。

小さなヨットの冒険物語の圧巻は、南米の最南端ホーン岬を無事に通過した時だった。

何百艘かの帆船を呑み込んできた魔の岬を無事に通過できる確率は、小型ヨットの場合、精々1割ほどだった。明らかに命を賭けた無謀な冒険であった。

帰国後、彼は表の賑々しい冒険家の顔とは裏腹に、「冒険とは何か?」を自らに問い続けていた。

最終的に彼がたどり着いた先は、ヨットスクールの運営だった。多くの青木ファンは彼に冒険家を続けてほしいと願った。でも彼は冒険をキッパリ否定する。

「ヨットは楽しく、人の心を癒やしてくれる。そのために大事なのは、海上での危険回避だ」

ヨットスクールを始めた青木は、もはや冒険家ではない。

「でも、そうだろうか」

青木ヨットスクールの最上級クラスに、青木自身が担当する「外洋航海コース」がある。

沖縄の離島へ寄航したときのことだった。エンジンが故障し、強風の中を帆だけで入港した。前に岸壁、横に巨船、一歩誤ればヨットは衝突、大破を免れない。それでも青木は最後まで手を出さなかった。

間一髪、訓練生は己の判断で舵を切り難を逃れた。命の危険さえあった。

これはスキッパー(艇長)になるための訓練生に、危機管理を体得させる合理的なプロセスだったのか?

それとも、彼の判断は無謀な「冒険家の『冒険』」だったのか?

答えは、青木の胸の内にある。

(もり・まこと=名古屋市立大学特任教授)